

論 文

保育者養成における音楽表現“オペレッタ”の意義

The Significance of the ‘Operetta’ Form of Musical Expression in Training Child-care Workers

武 岡 真知子

TAKEOKA Machiko

I はじめに

保育者養成の音楽指導の立場から、音楽指導内容について今日まで検討を重ね、そのあり方を追求してきた。保育内容「表現」は子どもの感性を育て、表現する意欲を養い、創造性を培うという観点から設けられた領域である。子どもは生活の中で、音楽遊びを通して人と触れ合う機会を持ち、互いの感情や意志を表現し、共に楽しみ、共感し合っている。それにより、豊かな感情や表現力、調和のとれた精神を培っていくことができる。特に、現代に不足しがちな人と関わる力は、自分の意思や感情を豊かに表現したり、相手の気持ちを感じ取ることを十分に経験することにより養われるのである。

このように、子どもの育ちにとっての音楽の意味や、生きることの中に音楽がどう位置付いているのかを、十分に保育者は理解しておく必要がある。

また、感受性や創造性、豊かな表現力を身に付けることは、子どものみならず将来保育者となる学生にも共通していえる。それには、保育者養成の課程において、学生一人一人にとって保育の本質が身に付く授業内容を提供していかなければならない。限られた授業時間の中で、

最大限に音楽表現への充実した指導内容を図り、指導に当たることは、将来、子ども達に音楽の楽しさや美しさを伝えることができる保育者、感性や表現豊かな保育者として活躍できることを保障することになる。

II 音楽表現指導への探求

1. 学生の実態調査を基に

保育者養成での音楽表現指導内容において、カリキュラムの見方、捉え方について論及するには、学生の姿抜きで考えることはできない。

学生の表現への実態を把握するために、本学幼児教育学科学生を対象に音楽表現の意識調査(武岡2008)を実施した結果、歌への愛好度、人前での身体表現、育ちにおける音楽遊びの体験などは保育者を志すにはあまり問題はなかったが、人前で歌うのが嫌いであるという学生が半数近くいた。このような意識を持って子ども達に歌っても、歌の楽しさを伝えることが出来ないと思われる。

これを踏まえ、子ども達の前で自信を持って楽しく歌うことができる保育者を目指すには、どのような方法で音楽表現指導がなされるべきか検討していく必要がある。

2. 効果的な表現指導への方法

歌唱の授業において、学生自らが感動を持ち、気持ちを込め、歌うことに喜びが感じられる内容にするには、単に歌を歌うのではなく、歌を楽しめる内容に工夫していく必要がある。例えば、歌に遊びが入っているものや、ストーリー性のある歌はイメージーションが膨らみ、楽しさが伴うので自然に楽しく歌えるようになる。展開や発展性があり、歌うことや身体表現を一人で行うのではなく、グループで表現し合い、遊び心を持った授業内容であればなお楽しく感じられる。

このような楽しい音楽遊びを十分に体験することで次第に表現力が育ち、歌うことへの喜びや自信にも繋がっていく。

以上を踏まえて考えると、保育者養成の音楽表現指導における効果的な方法の一つとして、音楽的劇遊びが挙げられる。

III オペレッタへの取り組み

1. オペレッタ公開の意義

オペレッタとは、オペラを小規模にしたもので、台詞、歌、踊り、美術などを統合した軽歌劇で、ユーモアやコミック性のあるものをいう。保育向けとして、あるいは子どもに観賞してもらうのに適していることから、養成校においては広くこの名称が用いられている。内容は、音楽領域のみならず、総合的な活動として体験できる。

本学科の音楽表現の授業では、保育に関わる様々な音楽表現活動を体験的に学ぶが、初期の段階の劇遊びとして、童話や民話など親しまれている名作の劇化も体験している。さらに、2年後期に半年掛けて創作オペレッタに発展させ、多くの子ども達に観賞してもらう機会を設けている。

学外の発表の場の一つである「こどものための音楽会」を永年開催し、多くの保育所・幼稚園児に継続的に観賞してもらっている。学生達は取り組んできた成果が公開でき、子ども達には音楽に触れるよい機会となっている。

これ以外にも、多くの幼児向けのイベントに参加出演し、毎年5千～7千人の幼児やその保護者にオペレッタを観賞してもらっている。

このような発表という目的意識の強い、総合芸術であるオペレッタは、学生には豊かな表現力や感性が育つ貴重な体験の場となっている。

台本や衣装、大道具も学生の手作りで、みんなで創る共同的な活動の中で感動と喜びが生まれる。人前で歌ったり、踊ったりすることが楽しいと感じられるようになるには、このような主体的で楽しい音楽体験を重ね育むことが大切である。

子ども達にとってもオペレッタを観賞することは、楽しさを味わいながら、総合的に豊かな感性や表現力が育っていく。劇を通して得た感性は、人間のあり方、生き方に影響していく。

2. 観賞における教育的な意図

本学科のオペレッタには、教育的な意図、更には人間のあり方など、子ども達に伝えたいことが数多く構成に組み込まれている。伝えたい内容に表現方法を研鑽し、質の高いものになるよう努めてきた。このような質の高い表現に触れることは、子ども達の表現力や感性を高める上でも欠くことのできない重要な要素となる。それ故に、子ども達により影響を与えられる内容となるよう真摯に取り組んできた。

台本の創作においては、ストーリーが分かり易く、美しさ、楽しさ、面白さが感じられ、夢、憧れ、冒険などを織り込め、泣き笑いなど、豊かな感情表現を演出し、子ども達に感動

を与えられるものになるよう努めてきた。

楽しいストーリーの中には、子ども達に伝えたいメッセージが込められている。優しさ、愛、真実、努力、忍耐、共感、正義、協力等であるが、仲良くすることや物を大切にすることなど、子ども達に身近に感じられるものも取り入れている。

近年の台本の特徴としては、環境問題や友達の大切さ、困難に負けず、協力して乗り越えていく勇気、思い遣りなどのメッセージが込められているものが多い。特に、環境問題に重きを置いているのは、原作が学生の作品によるもので、子ども達に関心を持って考えてもらいたいと願っている学生が多い故である。

3. 近年公開した創作オペレッタの紹介 (題とテーマと内容)

(2003年) 題「ロボットのなみだ」



<メッセージテーマ>

自然環境(海)を大切にする心、優しさ、協力、仲良し、真実

<主な内容>

ある日、子どもたちは未来からやってきたロボットに会う。「未来ってどんなところ?」「行こう!よしワープだ」ロボットと一緒に未来にワープ。未来の汚れた海をそうじをしているとヘドロにおそわれ、着いた所は海の底。そこにはゆかいな海の仲間たちや環境汚染で困っ

ている魚たちが、海を人間たちが汚していると訴える。こどもたちが地球を守る決心をするとロボットの目に出るはずの無い涙が。

(2004年) 題「森へ帰りたい!ーサーカスの仲間たちー」



<メッセージテーマ>

自然環境(森)を大切にする心、思い遣り、共感、仲良し、勇気

<主な内容>

サーカスで活躍している動物たちが本当は森へ帰りたいことを知った子どもたちは、サーカスから動物たちを逃がしてやる。しかし、やっとたどり着いた森では思いもよらないさまざまな試練が待っていた。それぞれ違った環境で生きる動物たちの思い、荒れた森を動物たちのために何とかしなければと訴える子どもたち。やさしい心や環境がテーマ。

(2005年)題「南北極物語」



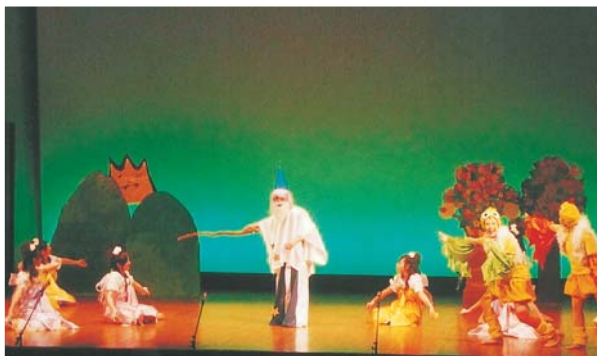
<メッセージテーマ>

自然環境(温暖化を防ぐ)を大切にする心、愛、優しさ、協力、仲良し、勇気、努力

<主な内容>

地球温暖化により南極の水が割れ、仲間が遠くへ流されてしまったペンギンやシロクマたち。助けに行こうと旅に出るが、船が沈んだり動物園に売られそうになったりする。流された仲間がいるという動物園では、フラミンゴたちに羽をばかにされながらも、ようやくペンギンたちは仲間に出会う。仲間を大切に思う気持ち、資源の無駄遣いを見直し、地球を大切にしていこうというメッセージが込められている。

(2006年)題「魔法の夢の石」



<メッセージテーマ>

夢、思い遣り、優しさ、協力、仲良し、勇気

<主な内容>

歌手になりたい鳥のピッピとチッチは、夢が叶うという魔法の石を求めて、旅に出かける。途中、いろいろな動物たちと出会い、一緒にガリガリ山を目指す。そこには魔法使いや怪獣が待っていた。魔法の石を手に入れても、叶えられる願いはたった一つだけ! 自分こそ願いを叶えようと争いがおきるが、ピッピ達によって仲間を大切に思う気持ちが芽生え、みんなが幸せになれる方法を考える。自己中心的ではなく、思い遣りの心を持つ大切さがメッセージとして

込められている。

(2007年)題「オアシスを求めて」



<メッセージテーマ>

自然環境(水・森)を大切にする心、愛、優しさ、思い遣り、協力、仲良し、勇気、努力

<主な内容>

水不足に苦しむ砂漠の国の優しいお姫様は、人々のために水を求めて旅に出る。一緒についできた動物たちと、途中助けたライオンをお供に、ようやくオアシスの水を見つける。

しかし、そこには恐ろしい火の魔女たちが待っていた。協力して追い払うと、湖から水の女神様が現われ、木を育てることが水を得る方法と教えてくれる。みんなは豊かな緑の地球にしようという誓う。

(2008年)題「こころを一つに」



<メッセージテーマ>

自然環境(森)を大切にする心、愛、優しさ、思い遣り、協力、勇気、信頼

＜主な内容＞

ある日、嫌われ者のコン太は村を追い出され、深い森に迷い込む。そこでは、意地悪な古だぬきから助けてくれた森の妖精や女王達に、魔法で願いを叶えてもらい、人気者のスターに!

でも、それは一時のむなしい夢であった。そこへ、森の動物たちから大切な森が人間によって壊されそうになっていることを知らされる。力を合わせ森を守り、コン太はみんなから信頼を取り戻す。

4. 発表を終えて

オペレッタを演じ終えた学生は、「終わった時はほっとして達成感を味わっていたが、時間が経つと、子ども達の前で演じ、喜んでもらったことに感動して涙が止まりませんでした。」と述べていた。練習段階では、他者との意見交換におけるトラブル、不安、焦りなど、団結・協力することの難しさがみられたが、終えてみると、満足感や達成感、喜びが学生から伺えた。

また、この「こどものための音楽会」を、他大学の学生（50名程）が継続的に観賞していたが、その感想レポートには、次の内容が記されていた。

「台詞に身振り手振りを加えながら、子ども達に話し掛けるように語り、会場の子どもの声にも受け答えていた。まるで、学生と子ども達で舞台を作りあげているようであり、子ども達が応援しながら、夢中になって観ている様子が一目で分かった。」

「オペレッタを観賞して、その楽しさ、幅広さ(可能性)、教育的な意図、更には人間のあり方など、子ども達に伝えたいことが数多く構成に組み込まれていた。伝えたい内容、表現方法を研鑽したがゆえに生み出された質の高さによる

ものだろう。こうした質の高い表現に触れることは、子ども達自身の表現の質や可能性を高める上でも欠くことのできない重要な要素である。それ故に、こうした質の高い表現にふれる機会を設けることに、保育者として取り組んで行かなければならない。そのことに気付けた点も含めて非常に参考となる機会であった。」

他43名の感想も同様のことが記されており、オペレッタの発表は演ずる学生のためばかりでなく、他の保育に関わる人々のためにも重要な行事として位置付けられていると感じた。

5. 完成までの流れと方法

全体の台本作りは、原作の学生の作品(複数)の中から選択し、それを基に指導者側で劇用に手を加えたものを、学生がグループに分かれて場面ごとに書き、仕上げは全員で完成させている。全体の流れは、プロローグから始まり、起承転結を大切にし、最後はエピローグで終結させ、カーテンコール(挨拶)で終える。

- | | |
|-------------------|---|
| 1. 開幕（導入部） | 起 |
| 2. 物語の深まり（舞台内容深化） | 承 |
| 3. ストーリーの展開（舞台転換） | 転 |
| 4・閉幕（終結部） | 結 |

台詞は、登場する人物（上演者）の役柄に合わせて個性的に考え、歌・踊り・音楽はそれぞれの場面に効果的に入れていく。歌は、一人で歌う、グループで歌う、全員で歌う等、様々な形態で表現する。踊りも同様であり、演出効果を考え、幅広く工夫している。

役決めは希望者を募り、話し合って決めるが、必要な場合は学生同士のオーディションも行う。

組織として、実行委員、音楽、装置(照明など)、演出(台本・演技指導・踊りの振り付け)の係

りに分かれて担当する。衣装は基本的には各自で作り、大道具・小道具は装置係りで制作し、それぞれイメージが異ならないよう絵(スケッチ)を描き、場面ごとに統一していく。

演技指導は、指導者または学生同士で行う。台本立ち読み・立ち稽古と練習をし、同時に歌・効果音・衣装・道具の用意を同時進行で行っていく。

多くの人と関わり、一緒に作り上げていく過程では、それぞれの育ちや感性の異なりから、意見の相違で対立し、トラブルが起きる。互いの感情や意思を表現し、共感することで、人との関わりを持つ力、感受性、想像力など豊かな心が育っていくのがオペレッタである。これは子どもにも共通していえることから、学生が劇遊びを体験することは、保育者として子どもの育ちに関わる上で大変に有効であるといえる。

Ⅳ 子どもの劇遊び

1. 子どもの劇遊びへの理解

養成校でオペレッタを行うには、幼児期の劇的表現遊びの特徴や発達を理解しておく必要がある。

子どもの劇は、見せるための劇というイメージが従来強いが、ドラマティックプレイ(劇的な遊び)として捉えられなければ意味がない。幼稚園教育要領に「演じて遊んだりする楽しさを味わう。」という語句があるように、自由に自己表現し、自分が描いた想像の世界にストーリーが展開され、子ども自身が創りだすことばや行動が保障されることで、豊かな表現力や感性が育つ。自分たちで作る喜びが十分に味わえ、一人一人の子どもの感性と生活体験の中から思い描いた表現によってストーリーは展開されていく。当然トラブルも起きるが、自分の気持ちを伝えたり、相手の気持ちに気づいたりして、心

の成長や、コミュニケーション能力が育つ。

内容的には、実際の生活の中での実体験から生まれたもの、空想の世界から生まれた劇遊びなど様々で、日常的な場で空想と現実の世界を両方行き来し、夢を膨らますことができる。

このような劇遊びを通して人と触れ合う機会を持ち、豊かな感情や表現力、調和のとれた精神を培っていく。子どもは人との関わりの広がりの中で、他者との共感や思いやり、集団への参加意識など、将来の社会生活で必要とされる主体性や社会性を身につけていくのである。

2. ごっこ遊びから劇遊びへ

ごっこ遊びに筋書きはないが、子どもの筋書きの無い「演じて遊ぶ」段階から、場合によっては、子どもが遊ぶその展開の中で筋書きが作られることがある。子どもたちが考えた筋書きを、共有化して楽しむことが発生することは、これもひとつの大事な動きと思われる。

発達的にみると、2歳頃は、自分のイメージで想像の世界をつくり、その中で自分自身や身の回りのものを変身させて遊ぶ。この頃は一人、または親や兄弟がつき合って遊ぶことが多く、自己中心的な遊びである。4歳頃から複数で遊ぶことを好むようになり、社会的な遊びへの移行が始まる。ルールある遊びへの移行期になって、自己主張をしたり、がまんしたりして集団への適応を学んでいく。銘々で遊ぶ「象徴的遊び」をみんなで遊ぶ劇遊びへと発展させていき、仲間と協力しあって表現する喜びを体験していく。この時期に豊かな想像力や表現力を養うことができるよう援助したいものである。

○子どもの劇遊びのポイント

- ・ごっこ遊びの芽を育てる。見立て遊びやままごと遊びの中で友達を巻きこんでいく。
- ・劇的なゲームや歌やお話で劇を作って遊ぶ。

- ・ことばと動き、感情表現を部分的にしながら、それらをつなげてストーリーを仕上げていく。
- ・一人一人自分の存在感が確認できるようにする。
- ・行事などで劇を公開するときは、子ども達には初めは知らせない。見せるために作るのではないということ、親たちの過去に体験した劇へのイメージを啓蒙していく。
- ・保育者は柔軟なところ、遊びごころを持って子どもと一緒に劇遊びを楽しむ。

3. 劇遊びでこころを育む

劇を通してどんな子ども達に育って欲しいのかを考え、子ども達と共に創り上げていく。劇を通し、人の喜びや悲しみなどがいろいろな役を通して分かり、自己中心的ではなく、人のことも考えることができるようになっていく。そのことが、その後の子どもの生き方に影響していく。協力し合って一緒に生きている、すべての命が大切なのだということが感じられるような体験を、劇を通し一度は経験させたいものである。子ども達全員が主役で、自分の思いを自由にのびのびと自己表現でき、役になりきって遊べる楽しいムード作りが大切である。参加する保育者の役割も大切で、意地悪なおばあさんやおおかみ役などを演じて見せることで、いろいろな役になりきる面白さを伝えていくことができる。

4. 日常保育の中で表現を育む

普段の保育の中で劇的表現を育むには、ゲームや歌やお話で劇を作って遊ぶ方法がある。「あぶくたった」や「おおかみさんいま何時」のような劇的なものにゲームが伴うものや、童謡の「いぬのおまわりさん」のような未解決の

まま終わっている歌詞に続きを加え、劇として遊んだりする。絵本や物語の演じてみたい場面を取り出し、イメージを共有しながら人形劇などで遊ぶことから始め、次第に動きが伴う劇遊びに発展していくことができる。

また、日常の保育の中で表現力を育成する前段階として、お返事遊び、まねっこ遊び、おなまえ遊び、といかけ遊びがある。あるいは、ストーリー性のある歌から発展したもので、「あめふりくまのこ」「やぎさんゆうびん」「山のワルツ」「犬のおまわりさん」「もりのくまさん」など、身近な歌そのもので物語に発展することができる。そのほかにも、身近な生活の出来事を歌と物語にし、劇化する。例えば、芋などの収穫の喜びや飼っている動物等の感動場面である。

V 卒業学生の意識調査

＜目的＞保育者養成での音楽表現「オペレッタ」の意義を論及するには、体験者であり、現在保育者である卒業生の意見を参考にすることが必要と考え、意識調査のアンケートを実施した。本学幼児教育学科卒業生を対象に音楽表現オペレッタの意識調査を基に意義を考察する。

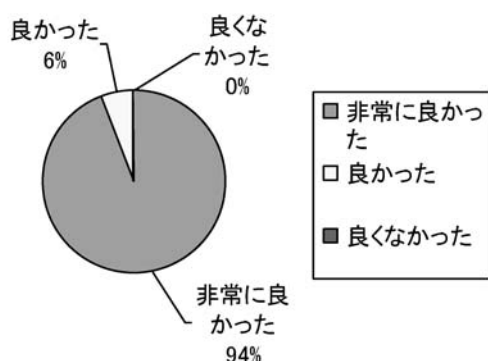
＜方法＞

- (1) 調査対象 富山短期大学幼児教育学科卒業生95名（卒業後2年～5年目）
（内訳 女性90名、男性5名）
- (2) 実施期間 2009年9月～10月実施
- (3) 調査方法 アンケートの実施 設問2
（1問につき3段階評価と自由記述）
- (4) 調査内容 音楽表現オペレッタの意識調査

＜結果＞

- ・アンケート結果(回収率89%)

問1) オペレッタを体験してみてどうでしたか。



自由記述（回答より抽出）

- ・人前で演じる楽しさや達成感はとても大きかった。オペレッタの製作過程では、ストーリー、衣装、小道具など、友だちと話し合いながら、色々と工夫して作っていくことが楽しかった。
- ・創作過程では、様々な個性の人達と共に同じものを作り上げていくことが難しく感じられたが、それも全て現場での実践に役立っているように感じられる。
- ・人数が多いせいか、思いや考えが合わず、力を合わせてするということが難しく感じられ、苦勞した。しかし、沢山意見をぶつけ合い、意見がまとまった時にはとても強い連帯感が生まれたと感じた。それからは、協力してスムーズに進めることができた。色々なことを乗り越えて出来上がったオペレッタだったから本番を終えた時は、達成感と心が熱くなるような感動があった。
- ・一つの作品を創り上げる為、皆が意見を出し合い、演じ終えた後は全員が達成感で一杯であった。一人一人、自分の役に責任を持って取り組んでいた。クラスの交流を深めることができた。
- ・就職活動や授業と両立してオペレッタを仕上げていくことは大変であったが、ステージで

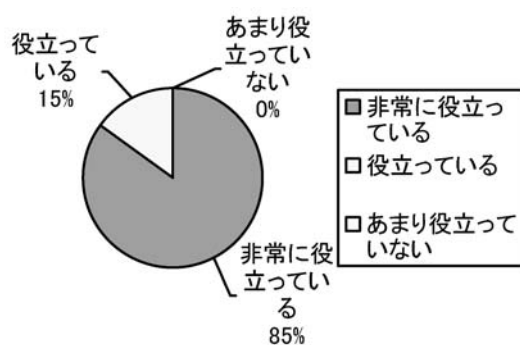
子ども達の前で演じきれたことの喜びと達成感はひとしおであった。

記述の分析

抽出文同様、全体的にも他者との協力、共同で行うことの難しさが記されており、意見交換におけるトラブル、緊張・焦り・多忙感・苦勞感等、様々な困難の中で、作品を完成させてきた状況が読み取れた。しかし、発表を終えた後、観客である子ども達の声援を受け、満足感、達成感、感動等素晴らしい体験となっているようである。

歌あり、踊りありの音楽性に富んだ表現の世界に入り込み、子ども達を楽しませ、自分達も表現することを楽しみたいという思いがあったからこそ、様々な困難を乗り越えられ、感性や表現力を培うことができ、有意義な体験となっていることが伺える。

問2) オペレッタの体験が保育現場で何か役に立っていると感じられますか。



自由記述（回答より抽出）

- ・職業柄、園児や人前で話したり、演じたりすることが多いが、オペレッタを体験してから人前で話すことが楽しく感じられるようになり、職場で役立っている。
- ・自分の思いの表現、演じることへの自信がつい

た。絵本の読み聞かせなども上手く出来るようになった。

- ・生活発表会があるが、その準備の過程で、自分がオペレッタを体験した時の楽しさや達成感を子ども達にも感じてもらいたいと思う。お話作りや歌など、一から作り上げた経験や、そこでの成功や失敗を生かしていると思う。
- ・クリスマス会や七夕の集いやひなまつり会などの行事で、職員の寸劇をする時にとても役に立っている。全体の話の構成や大道具の配置、演技方等を考える時に、オペレッタのことを思い出しながらしている。
- ・オペレッタをやり遂げたということが、今の自分の自信に繋がり、色々なことに主体的に自信を持って取り組むことができるようになった。
- ・低年齢児の保育をしているので、劇までは出来ないが、遊びの中で生かしている。

記述の分析

抽出文では、発表会等の行事に役立っていることが記されているが、それ以外に、オペレッタでの楽しい体験を子どもに伝えることができ、それが子どもに関わる時に生かされているという記述が多かった。子どもに表現を伝える時、教える本人が表現を楽しまなければ伝えることはできない。実際に自分が体験してみて、楽しい、おもしろいと感じてこそ、楽しい表現活動を子ども達に伝えることが出来るということである。

養成校におけるオペレッタの体験は、表現力や感性及び技術の向上のみならず、表現する喜び、オペレッタの楽しさを子ども達に伝えることができるということに意義があると考えられる。

VI 終わりに

保育者養成でのオペレッタの体験は、現在保育者である卒業生の意識調査の結果により、有意義な体験であったことが確認できた。表現する喜びや楽しさを味わいながら、感性や表現力を培うことができ、満足感・達成感・感動等、素晴らしい体験となっているようであった。発表会等の行事に役立つだけではなく、普段の保育で子どもとの関わりに生かされているという意見も多かった。

互いの感情や意思を表現し、共感することで、人との関わりを持つ力、感受性、想像力など豊かな心が育っていくのがオペレッタである。これは子どもにも共通していえ、学生が劇遊びを体験しておくことは、将来保育者として子どもとの関わりで大変役立つといえる。

外部に公開するという目的意識のあるオペレッタは、2年の後期に器楽演奏コースと選択になっており、全員がオペレッタを体験する訳ではない。オペレッタを選択する学生は、元々人前で歌い表現することに慣れており、豊かな表現力が身に付いている者が多い。一方、一部ではあるが、表現に不慣れで、自信が持てないという理由で選択しない学生もいる。人前で歌ったり、話すことが苦手であっても、体験を積み重ねることで表現力が付き、自信が持てるようになってくる。そうになると、表現することが楽しく思われ、子ども達にもその楽しさを伝えることができるようになる。

アンケートにあるように、保育者は職業柄、人前で話したり、演技したりすることが多い。記述に「オペレッタの体験により人前で話すことが楽しく感じられるようになり、職場で役立っている。」とあるのは、オペレッタに時間を掛け、練習を積み重ねていくことで表現力が付いてくる。子ども達に良い作品を提供したいとい

う思いから、授業時間以外にも自主的に練習し、最大限に努力をして仕上げていく。その過程において、豊かな表現力が培われるのである。それは、将来自信を持って子ども達の前に立ち、表現豊かな保育者として活躍できることに繋がっていく。

参考文献

- 1) 武岡真知子「保育者養成における保育内容音楽表現指導の方法について」富山短期大学紀要43巻(2) P11-19 2008
- 2) 大畑祥子「保育内容音楽表現」建帛社1999
- 3) 岡村季光・増原喜代「保育学生における‘子どものためのオペレッタ創作に関する一研究—学生生活における適応感及び充実感の関係—」奈良保育学院研究紀要12号P11 - 38 2006
- 4) 富山大学教育学部「こどものための音楽会」学生観賞レポート(2006)
(平成21年10月30日受付、平成21年11月9日受理)